

2022年3月26日（日）「細い綱の上で」

ヘブライ 12:1-2

1 こういうわけで、私たちもまた、このように多くの証人に雲のように囲まれているのですから、すべての重荷や絡みつく罪を捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。2 信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう。この方は、ご自分の前にある喜びのゆえに、恥をもいとわないで、十字架を忍び、神の王座の右にお座りになったのです。

2022年度最後の主日礼拝となりました。受難節も終盤を迎え、来週は棕櫚の主日、その次はイースター礼拝となります。新しい年度を迎えるにあたって、もう一度心の帯を締め直したいと思います。物事の終わりを大事にすると、私たちの人生の質は大きく変わってくるでしょう。できる限り物事を整理・解決しておくことが、節目節目において大切であります。そのことを繰り返し思い起こしながら生きていくために、私は D.ワングの『狭い道』という本を折々に読み直しております。今日はこの本の第3章の内容を分かち合いつつ、私のことばに直して説教とさせていただきます。

第3章のタイトルは「張り綱の上の緊張」となっていますが、著者がこの章全体の中で抱えている一つのイメージがあります。それは、信仰の道とはサーカスにおける綱渡り師が歩く細いロープに似ているということです。「**私たちが墮落した世界におり、罪深い体の中にある限り、私たちは相矛盾した二面性と葛藤する**」(p.39)。冒頭で著者自身の経験が綴られていますが、彼は学生時代に物理学を専攻していたようで、ある実験において仲間たちと一緒に不正を行なってしまったことを悔いています。著名な科学者たちによって既に発見されている答えがあり、自分たちの力でその答えに到達するという課題が出されていたようです。しかし、どうしても時間内にそれが達成できなかつたので、彼らは答えから逆算して過程となる数値を割り出すということをやったと言います。これは名案であったようではありますが、著者の心の中に「誠実の原則を破った」という思いを残しました。あたかも自分たちで答えに到達したかのように見せかけて課題を提出してしまったということでしょう。

このような誘惑は絶えず私たちに迫ってくるのであり、小さなごまかしを自分に許しながら生きているということがあります。それは、誰も知らないところで自分の中で許容していることであり、神と自分との関係以外には問われないことであるかもしれません。何かを見て見ぬふりをするのであったり、言うべきところで黙っていることであるかもしれません。それは、自分の良心だけが知っている問題であって、神の御前に誠実であったかどうか、それだけが問われる部分であります。「**私たちは、創造主によって立てられた法則に従う宇宙に住んでいます。しかし、創造主によって私たちの心に立てられた律法を犯す不完全な世界に私たちは住んでいるのです**」(p.37)。

著者は、人生を「両端に危険を伴う狭い尾根の道」(p.36)に譬えています。山の尾根の道は狭く、左右どちらにも転げ落ちないように気をつけなくてはなりません。常に小道の中央を歩いていくことが教訓として教えられています。主がヨシュアに語られたように、「あなたはただ、大いに強く、雄々しくありなさい。私の僕モーセがあなたに命じた律法をすべて守り行い、そこから右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功を収める」(ヨシュア 1:7)という約束を常に胸に抱いて歩いていくということです。第1章ではこのことが、正しくあろうとするあまり他者を裁く生き方に偏ってしまうことと、放縦に身を任せて墮落していくこととして警告されていました。どっちに偏ってもいけないと。しかし、人の心の中には両方の崖が存在し、見えない力で私たちの足を引っ張ろうとしています。正しい生き方を熟知していたパウロが次のように言っています。

私は、自分の内には、つまり私の肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はあっても、実際には行わないからです。私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っています。(ローマ 7:18-19)

このパウロの告白は、彼が救われる前の状態だけを指して言っているのではなく、救われてからも尚、同様の葛藤の中にあることを認めています。「人の住む世界が不完全だけでなく、私たち個々人がひび割れたものなのです」「脳は指令を出すのですが、手足はそれを実行するのが難しいのです」(p.38)。

頭では理解しているけれどなかなか実行に移せないということは、多くの人は何らかの意味で経験しているところではないでしょうか。そのような葛藤が心に生まれているなら、自分の中に問題があるという事実を理解しているはずなのです。「狭い道」を見出すとは、真理の道が示されるということ。選択肢が明確化され、どちらを選ぶべきかが分かってくるのです。しかし、それを実行するとなると腰が重い。いくつかの例を挙げてみましょう。

- ・ 私たちは正式な遺言状を書き残しておくことは大事だということを知っているでしょう。しかし、実際にそれを行動に移している人は稀です。
- ・ 日本が地理的に地震に見舞われる可能性が高いことは、ほとんどの人が知っています。ですが、具体的に災害に備えて生きている人は何割いるでしょう。
- ・ 和解すべき相手がいることは分かっているけれど、そのままの状態になっている人も少なくないでしょう。

「狭い道」を歩き続けるためには、自分を打ち叩いて従わせなくてはならない場面が多くあるのです。

むしろ、自分の体を打ち叩いて従わせます。他の人に宣教しておきながら、自分のほうが失格者とならないためです。(Iコリント 9:27)

私たちは、問題が何であるかを理解すると、あたかもそれで問題が解決したかのような錯覚に見舞われることがあります。正しい選択肢を見出しても、その道を歩き始めないかもしれません。あるいは、その道を歩き始めても、最後までやり通さないかもしれません。

著者は二つの実例を挙げて、このことを説明しています。一つは、主イエスに「永遠の命

を得るにはどんな善いことをすればよいか」と問うてきた金持ちの青年です(マタイ 19:16-22)。主イエスは、幼い頃から戒めをことごとく守って生きてきたと自負する彼に、財産を手放して貧しい人々に与えるよう助言なさいました。この教えを受けたとき、青年はそこに真理の道があるということを理解したことでしょう。しかし、彼は「悩みつつ立ち去り」しました。道を見出しても、その第一歩を踏み出すことができなかつたのです。

著者は自分自身の経験も実例として挙げています。彼は車を運転していたとき、ハンドルがグラグラするのに気づき、自動車修理工場に持って行きました。修理の人は、車輪を外して車軸の調整をしなければならないと言いました。その時は修理人に時間がなかつたので、後日改めることになりましたが、著者は問題が何であるかが分かつたので、安心してその車に乗り続けていました。実は、問題は何も解決していないのに、知つたことで安心してしまつたのです(p.39)。こういうことは私たちの人生にもしばしば起こります。

著者は、安定と停滞の違いを説明していますが、これを理解することは重要です。「停滞は、いのちと動きのない状態ですが、安定性には、いのちと躍動があります」(p.40)。ここで「綱渡り」の話が出てくるのですが、ロープの上を歩く人は常にバランスを取って体重移動していなければ簡単に落ちてしまいます。「安定」という状態を保つことは、実は大きなエネルギーを費やしていることが分かる。私たちの人生には様々な問題が降りかかっていますが、それを放置しておくとも問題が腐り始め、だんだんと異臭を放つようになります。時間が経てば経つほど解決が困難になることも多い。停滞した状態は、物事を複雑にするのです。「安定」という状態が保たれているところには、その背後で実に多くの労力が費やされていることを忘れてはなりません。「とにもかくにも目を覚まし、張り綱の上で一貫してバランスを取ることが重要なのです」(p.40)。

最後になりますが、今日の聖書箇所を読み直してみましょう。

こういうわけで、私たちもまた、このように多くの証人に雲のように囲まれているのですから、すべての重荷や絡みつく罪を捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう。この方は、ご自分の前にある喜びのゆえに、恥をもちとわなないで、十字架を忍び、神の王座の右にお座りになつたのです。(ヘブライ 12:1-2)

ここでヘブル書の著者が言っていることのポイントを探てみると、信仰のレースを走り抜くためには、生き方における消極面と積極面があることが分かります。

消極面……重荷や絡みつく罪を捨て続ける

積極面……主イエスを見つめながら忍耐強く走り続ける

「重荷」という言葉は、何らか人生の足を引きずらせている問題のことが言われているでしょう。解決できるはずなのに放っておいている問題はないか。また、常習的になっている

罪があると、人はそこに良心の呵責さえ覚えなくなっていくものです。それは、どの段階であつても捨てるべきでしょう。

主イエスを見つめるとは、主イエスの生き方を見続けることと言ってもいいかもしれません。主イエスが公生涯において見つめ続けておられたものは、十字架でありました。その「神の目的」へ向かってまっしぐらに歩み続けておられた。「イエスは、誘惑してきた悪魔を一蹴し、ご自身を詰問した王や支配者を叱責されました。何物も十字架からイエスの目をそらすことはできませんでした」「端から端へと私たちは揺り動かされますが、私たちがイエスに集中している限り、バランスを取り、歩み続けることができます」(p.41)。

新しい年度を迎えるにあたり、本年度の歩みをもう一度振り返ってみましょう。私たちは一人で走っているのではありません。多くの仲間と共に信仰のレースを続けています。このレースとは、自分との戦いです。物事を実行に移すことは簡単ではありませんが、まず第一歩を踏み出すということ始めてみてはどうでしょうか。どんなに長い道のりであっても、すべてはその一歩から始まるからです。私たちはどうしてその一歩を踏み出すべきなのか。それは、私たちが神の国に属する者だからです。神の国がもたらす解放へと聖霊が導いておられるからです。いきなりたくさんのことをする必要はありません。まずは一つ、できることから始めてみてはどうでしょう。

【祈り】

信仰の旅路を一足ひと足導いてくださっている天の父なる神様。2022年度もここまで支えてきてくださったことを感謝いたします。一年の歩みを振り返りますと、あなたの守りがあつたことを思い起こすとともに、聖霊を悲しませる罪に囚われた自分を悔います。また、心に示されていながら行動に移せていない大事なこともこの人生に刻まれています。今一度、第一歩を踏み出す力を与えてください。これは、律法的に生きるのではなく、福音の力によって押し出される解放への歩みです。どうか一人ひとりがベストを尽くして本年度を締め括り、新しい2023年度を歩み出すことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

一人ひとりの信仰の旅路に伴い、支え導き給う、父なる神の愛、
この心に真理の道を示し、それを選び抜かせ給う、主イエス・キリストの恵み、
選び取った道を最後まで踏み行かせ、主への献身を全うさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。